

【特集】 「美」の力

## 日本画作品と詩文の交歓

柴田 眞美

「詩的眞実」という言葉は、美術解剖学において『自然科学的正確度を離れた美しさがあふれていること』をさす。<sup>①</sup>描写は単なる写しでもなく、絵描きにとつて具象であれ抽象であれ、作品に接して詩のような世界に浸っていただけたなら、望外の喜びである。「詩」と「絵画」——これにはいかなる関係性があるうか？

芸術学（美学）の書物を覗いてみれば、『十六世紀から十八世紀中ごろにかけて書かれた美術や文学の理論書では、必ずと言っていいほど絵画と詩との密接な関係が論じられている。』<sup>②</sup>のであり、『絵画はその主題や人間的内容、そして目的において姉妹芸術たる詩と近似していなければならぬと考えられるようになった。』<sup>③</sup>という。レオナルド・ダ・ヴィンチは、『絵画を単に手先の仕事から芸術へと地位を上げる必要から』『絵画を軽んずる者は哲学をも自然をも愛さない。』、『詩人が耳によって感覚を満足させるとすれば、画家はより高級な感覚——眼によってしかくするものである。』<sup>④</sup>というように、絵画は詩をも凌駕するものと主張した。また、例えば、『実際、自然の眼よりも詩人の言う「孤独の喜びなるかの内なる目」のほうが生気のないイメージを心にもたらず

などと誰が言えようか。』<sup>⑤</sup>という記述に見るように、絵画を詩とは深く関係性を有するもののように思われる。

画家と詩人の対談中の言葉にも、『…あるいはそれは香月康男の仏心なのかもしれないと考えたりする。絵だって広い意味で一種の詩だろうが、香月康男は自分の鎮魂歌を歌っていないとも思う。他人を成仏させるための鎮魂歌を歌いつづけてきたのじゃないかと…』と詩人（安東次男）に語らしめている。

さて、筆者は「日本画」を志し制作を続けてきている中で、作品を毎回見にいらしてくれて、その後必ずどのような思いをめぐらしたのかを、丁寧な文章で書き送ってくれる旧知の友人をもっている。若いころの個展にたまたまお越しになられ、ワインを酌み交わしながら静かな時を過ごしたことに始まるかけがえのない友人（松木直子さん）である。本稿では、これらの中から五作品とそれに寄せられた「詩文」を紹介し、ささやかながらも【日本画作品と詩文の交歓】ということを示したいと思いついたのである。

現在の日本画の多くは、西洋画のタブローの影響で、（額装して）壁面に掛けるスタイルが定着している。しかし、歴史を振り返れば、屏風や掛け軸、襖、衝立、扇面…自由に空間を楽しむ絵画であった。公募展では多くの作品を一堂に扱う必要性から額装規定が多いので、本稿の創画展の作品は額装であるが、ジャンルを超えてのインスタレーション作品もこの頃では試し始めているのである。

「おしゃべりスケレッツ」 talkative skeletons (S50号)

(第四十二回 東京春季創画展)



蹄のあるものと、それに呼びかける人とは、  
サイレント映画の中でのように、

現在の一枚向こうでおしゃべりをしている。

その狭間から、大地の色のもが私たちのいる世界に  
顔を突き出している。

何かが私たちに気がついて話しかけてみようと思ったのか。

過去には色はないのだと思った。

あるように思うのは、記憶の中の色であって、  
色があるのは現在の物語。

(平成二十八年(二〇一六年)二月二十日)

「イノセント アース」 innocent earth (F100号)

(第四十六回 創画展)



いつだって地球は、闇と光と火と泥と、  
水と魚と鉱物と、緑と大小のものたちに満ち溢れながら、  
不斷にバランスを取っている。

だから、地球はこの三角が好き。

最小の枠組みで最大をも包み込みながら、その枠内の秩序はいつでも一定に保たれているから。バランスが取れていて、無理がなく、地球が地球らしく一番美しくいられて、いつでも自分を好きでいることができるから。

トライアングルの澄んだ音色は、地球の静かな喜びの種の  
鉱物の歌。

地球の三角が綻びたら、丸い地球は丸でなくなる。

やじろべえは放り出される。

地球は地球で在り続けたいだけ。この豊饒なトライアングルの  
音色をを響かせ続けていたいだけ。

地球の三角が綻びようとしている今、大小の緑色のものたちは、  
変わることなく、希望の種であり続けうるのか。

(令和元年(二〇一九年)十一月四日)

「ゆらゆら」 swaying (300×200×120cm)

(第七回 花とみどり・いのちと心展)



森の木陰の木漏れ日に、ゆらゆら揺れて夢を見た。

小舟は大海原に出る。「母」は小さな黒いヴェールを日除けに、  
小さな命を宿しつつ。

なぜ、陸に留まらない？

森の向こうの海から吹きくる風が、「さらに向こうだ」と誘うから。

この小さな命が私の海をゆらゆら揺れて生まれゆくように、  
私は海にゆらゆら揺れて探しゆく。

新たな天と地と出会いの中で、ゆらゆらゆら揺れながら、  
さらに生まれゆくために。

ゆらゆらの月明かりの中に、この「子」が生まれ出る朝、  
私たちは新たな陸に辿り着く。

波よ、水よ、風よ、鼓動よ、木漏れ日よ。

虫に、小鳥に、小動物。

草木悉皆、命を抱いて、ゆらゆらゆれるものは「母」。

(令和二年(二〇二〇年)十二月十二日)

「時のかけら」 pieces of time (300×300×100cm)

(第八回 花とみどり・いのちと心展)



温かな霧の中より生まれし生命の点は線となり、時の流れに併走す。  
鼓動といふ生命。  
呼吸といふ生命。  
歩みといふ生命。  
疾走といふ生命。  
佇みといふ生命。  
停滞といふ生命。  
躊躇ひといふ生命。  
邂逅といふ生命。  
今一度といふ生命。

時のかけらは、ポートルート。沼の小さな「時の蟻螂」が切り取り見せる静止画像。  
誰に見せる？  
自分自身に。

ふと立ち止まった時の、道に迷ったと思ってしまった時の、走馬灯。立ち止まるのは。次の章への小休止。行きつ戻りつは、まどかな出発点を思ひだしつつ進むためのスイッチバック。

線は絡みあってゐるやうでいて、生命の点は、いつだって、懸命に真っ直ぐに進みゆく。

あの日の霧の中に満ちてゐたのは、そう、祝福のファンファーレ。まどかな生命の進む先に、行き止まりは、ない。

(令和四年(二〇二二年)一月十九日)

「母へのオマージュⅡ」—黄泉の国へ旅立つ母—

(300×200×300cm)

Homage to my Mother Ⅱ —Leaving for Heaven—

(現代造形表現作家フォーラム展 2023)



生命は、子宮という海に生まれ、いつか空の大海原へと帰りゆく

襟巻大狐は考えた。

この家によつてきて、自分は今までどんなに幸せだったろう。

この横顔の美しい人はいつだって、自分を大切にしてくれて、

冷えた自分の体も心も温めてくれていた。

今はもう冷たいままのこの人に、自分は何をどうしてあげられるだろう。

部屋の窓の向こうの庭は、日の光でいっぱいだ。

いつの間にもやら大きく伸びた枝は、いつか誰かが落としていった何かの種だ。

そうだ。この大枝の先の空へ、この人を連れて行ってあげよう。

こつちだよつて、日の光でいっぱい空への道筋案内に

自分はなろう。

その先は？天馬が案内してくれる。

この人には搔卷麗の背中に乗ってもらえばいい。抱ききれないほどの思い出を腕に抱えて。

そっだよね。搔卷麗？

部屋の向こうの庭は、日の光でいっぱいだ。

(令和五年(二〇二三年)五月十四日)

○

筆者近年の、日本画作品と、日本画を含めたインスタレーションによる空間表現作品を、作品からのインスタレーションによる松木さんの素敵な詩文とともに紹介した。

近年では、日本画(絵画)のみの展覧会の枠を超え、立体・平面などのジャンルを問わず、思索する造形表現を目指す作家グループとのご縁を得て、壁面へ日本画作品を展示するのみならず、日本画を含めたインスタレーションを実験するようになった。それとともに、松木さんの寄せてくれる文も、粹な感想を超えて、「素敵な詩文」へとますます発展してきている。松木さんの詩文は、筆者が心の奥底に抱きつつも言葉には顕在化できない思いを、私の作品のフィルターを通して、诗情あふれる「ことば」へと変換してくれている、といつもつくづく思う。

芸術や美術といわれるものは、古代には非常に広範に人間が生きてゆくための様々な営みを指しており、時代と共にさまざまに分化していったが、現代美術ではまたそうしたジャンル分けがともに融合し、美術作品をきっかけにして様々な思索やコミュニケーションを誘発するものになってきているように思う。このような中で、そのような「美術の力」の一助になっていきたいと思っている。

詩文の掲載を快く承諾してくれた松木さんに心より感謝し、これからも詩文を寄せてくださることを願っている。

引用文献

- (1) 中尾喜保「新版 生体の観察」1980年、メヂカルフレンド社、初版、p63
- (2) 中森義宗「絵画と文学―絵は詩のごとく―」1984年、中央大学出版部、初版、p194
- (3) (2)と同書、p279
- (4) 杉田次郎「レオナルド・ダ・ヴィンチの絵画論」1941年、アトリエ社、初版、p272-273
- (5) (2)と同書、p266
- (6) 安東次男「安東次男 画家との対話」1974年、朝日出版社、初版、p118-119
- (7) 柴田眞美「日本画制作とその周辺―素材・生き物・心との対話―」、2002年、「人文学フォーラム」第20号、跡見学園女子大学、p51-54



(「ゆらゆら」部分)